

めくれ
ぺたへるつ

校長室のブロンズ像には「中身」がある。

小学校のころ、そんな噂が流れた。誰が言い出したのかも定かでない胡乱な噂だったが、そのときの校長は児童の間でも名の知れた変態だったから、たとえそれが事実無根の作り話であつたとしても、聞けばだいたい「あの校長なら、ひょっとして」と思ってしまう程度の信憑性はあつた。もちろん、くだらない噂だから耳にしても興味を持つ者は希だ。でも、中には……本当に残念なことに……おれの身近には、そういうことが大好きなヤツがいた。

今ではもう、ヤツは手の届かないところへ行ってしまったけれど、その思い出は、俺の脳裏に焼き付いて消えない。

それは、色あせない若い青春の一ページ。

ずっと昔のことだ。

おれたちは、まだ小学六年生だった。

「ぼくらでたしかめよう」

「無理だ」

夕焼けに染まる図書館で、おれはヤツと向かい合つていた。おれたち以外には誰もいない。そんな静けさの中でヤツは言つた。

「ぼくの辞書に『無理』という言葉はない」

ヤツは手にした分厚い本を指していたが、残念ながらそれは辞書ではなく百科事典だった。しかも、その平凡社世界大百科事典第一二巻にはそもそもマ行の項目が存在しない。しかし、そんなことはおかまいなしに、ヤツは続ける。

「ぼくは、これまで『無理』にうち勝つてきた。きみも知っているだろう。ずっとぼくのとおりで、見ていたはずだ」

おれは読みかけの本『男の子の心とからだ』を閉じて答えた。敬意と、親愛をもつて。

「ああ。全部見ていたよ。おまえが成し遂げてきた、全てのことを……」

(続く)